

医療において、宗教とライシテの原則が対立するケースを見てきたが、あらためてその理由をイザベル・レヴィの『*La religion à l'hôpital* (病院内の宗教)』から、まず食に関する部分について見てみたい。本書は教理解説書ではなく、ここで教義・教理を論考するつもりはないので、あくまで一般論としてご理解いただければと思う。

ユダヤ教やイスラム教にはそれぞれカシェールやハラールといった、多数の食に関する制限がある。動物の血は魂(命)と考えられており、人間の魂と動物のそれとを体内でまぜこぜにしてはいけないと教えられているという。食べてはいけない動物の一つに豚があるが、ユダヤ教では反芻しない動物として、イスラム教ではコーランに食べてはいけないと言及があるものとして禁じられている。ただその理由は不確かで、アラブの伝説によるとノアの箱舟上で汚臭がひどくなったとき、神が象の背中に手を当てると、そのおしりから子豚が生まれ汚物を食べてまわったことで不浄とされ、食さなくなったという。他にもかつてはイスラム教徒も豚肉を食べていたが、豚の一部を食べたことで病気になったものが出て、ムハンマドがその部位を食べるのを禁止したが、時代を経てそれがどの部位であったのか分からなくなり、知らずとはいえ預言者の教えに背かないよう、豚の全部位を食べなくなったという説もある。また乳と肉(ユダヤ教)、魚と乳製品(イスラム教)を一緒に食べない習慣もある。前者については申命記(14:21)に、母の乳で調理された子羊を食べてはいけないとあり、象徴的に両者に近親関係を見出すからとか、生(授乳)と死の両方を同時に想起させるからだという。

ユダヤ教では神学的な理由は見当たらないが、ヒレと鱗を持っていない魚介類を食べない。ユダヤ教、イスラム教ともに魚介類に関しては肉のように特別な準備を必要としない。

キリスト教もかつてはユダヤ教のように血を抜いていない肉を食べてはいけなかったようだが、9世紀のローマ教皇ニコラス1世はすべての肉を食べてもよいと宣言し、17世紀にデカルトが動物に魂はないとしたことで、畜殺も聖なるものではなくなった。したがってフランスでは血抜き儀式を行わず畜殺が行われ、血もブダンのようなソーセージなどで使用されている。そもそもマタイの福音書には「口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである」(新共同訳「マタイによる福音書」15:11)とある。また、今日ではこの習慣はもはや順守されていないが、何十年にもわたってカトリックと正教会は金曜日に肉を食べないようにしてきた。実際のところ曜日は特定されていないが、イエスが魚とパンを大量に増殖させてみせたのが金曜日だからその日に魚を食べるようになったという俗説がある。また地中海沿岸のユダヤ人が服喪期間中1週間食肉を避けたことから、その習慣にならってキリストが十字架にかけられた金曜日に魚を食べるようになったともいう。プロテスタントには、食に関する制限は一切ない。

当然、断食の期間は大きな問題となる。イスラムの断食ラマダンは、預言者ムハンマドが大天使ガブリエルによってコーランの啓示を聞いた時期に断食を行っていたことに由来するとい

う。ラマダン期間中の食事は日の出・日の入りの時間が基準になるが、看護師が他の患者とは違う時間に食事を提供するのを嫌うこともあるという。また、コーランの戒律を順守しつつ健康上の理由で断食を回避できる場合があるのにそれを理解しようとせず、断食の中断分を後に実践して補うことや断食の代替となる貧者への施しができないことを理由に、無理をしてでも断食を続ける患者もいるという。

ユダヤ教には、ヨムキプルという日がある。「コレヘトの言葉」(7:20)に、「善のみ行つて罪を犯さないような人間はこの地上にはいない」(新共同訳「コレヘトの言葉」)とあり、この日は前年の行いの赦しを請う重要な日である。ヨムキプルに行われる25時間の厳しい断食は、先行する償いの10日間を締めくくる。これも病人には配慮があり、水を飲んだり、食べ過ぎない程度に食事したりできる。

キリスト教の断食は、キリストが40日間行った断食に思いをはせ、イースターに先行する40日間の四旬節中に行われる。初日の灰の水曜日にまず行い、金曜日は肉食を避け、聖なる金曜日にまた断食を行う。同時に貧者への善行も行わなければならない。

病院職員が断食を行うのは自由だが、勤務時間や仕事内容の変更は認められない。マタイによる福音書(6:16-18)には、断食しているのは人に示さず、父なる神に示すものだとある。ユダヤ教のヨムキプルの場合、レビ記(23:28)に仕事をしてはいけない日とあり、その日は休暇を取る必要がある。当然誰でも休暇を申請できるが、差別を避けるためそこに宗教上の理由を書き記すことは禁じられている。

宗教による食事制限は、入院時に医師が処方する食餌療法や職員の職務に支障がない限り、ライシテの原則において尊重されるべきだ。しかし、1974年1月14日の病院運営に関する政令に、病院側は患者の病状に応じて、家族が持参した宗教的配慮を施した食事を廃棄する権利を有するとあるように、患者の命を最優先する院内での決定権は病院側にある。そして、レヴィは上記の宗教指導者層が患者の命を危険にさらすことはないと繰り返し書いている。どうしても患者が自身の信仰に反するとして病院の処置を拒む場合、病院はその宗教指導者との対話を勧めるが、宗教教団側が生命の危機を回避することは明らかであって、教団からの了解を得ることは容易であるという。

今回はユダヤ教、イスラム教、キリスト教の食に関する一部分を見たが、この本はライシテを推奨するものであるから、おそらくその他の宗教を含めたとしても、著者が上記の結論に至るのは必然かと思われる。それを差し引いて考えても、医療と教え、またその伝統との兼ね合いには対話が重要であり、食の宗教的伝統に関して病院側と共通理解ができれば、十分に問題が解決できることを示唆する内容であった。

[参考文献]

LEVY Isabelle, *La religion à l'hôpital*, Presse de la Renaissance, Paris, 2004 (pp.145-184).